

雨月物語の評価 (1)

——秋成と庭鐘と——

松田修

まえがき

「雨月物語」は在来の研究者から、多く——ほとんどことごとく（津田左右吉博士をのぞいて）、「日本文学史上最高の怪談小説集」という評価——讃辞を捧げられてきた。「日本文学史上最高の怪談小説集」というこの評価は、本質的な意味においては、今日なお、いや今日こそ、十二分に正当である。しかしこの評価、この結論、そして今日の定説を導きだすために試みられた方法を、今一度検討してみる必要はないであろうか。

たしかに「雨月物語」は我々に稀有な感銘を与える名作である。しかし、その効果、その感銘、その印象を、分析し客観的に再構成するにあたって、在来の研究は十全の意味において正当であつたろうか。

その評価のある部分は、むしろ信仰の名にふさわしく、多くを作家上田秋成の特異性から抽出された秋成観によるものの如くである。

在来の評価と方法から、認めるべきはそのままに認め、しからざるものを消去してゆく、そして今一度「雨月物語」を新しく作品自体に即して洗い直して享受し、鑑賞し、評価する、このことこそ今日の研究者のなり急務であり、また特権ではなからうか。

今日の「雨月物語」評価では、その代表として、いうまでもなく重友毅博士の、数多くの業績が考えられるであろう。「近世文学の位相」「雨月物語の研究」「近世文学史」の諸名著における「雨月物語」研究は、まことに研究の名に価する輝きと重みをもっている。私は、これらの業績によつて、秋成への招待をえた。ここに同博士にならつて、「雨月物語」の第一話「白峯」から話をすすめる。

巻頭第一に置かれてゐることから見ても、作者にとつては十分の自信があつたものと考へられるのであり、事実それは種々の点から見て「雨月」を代表する作品である——少くとも作品であつたと言ふことはできると思ふ。（「雨月物語の研究」五〇頁）

この博士の意見に私もまた全く同感である。「白峯」を論ずるこ

とはある意味で「雨月物語」を論ずることであり、それはまた秋成を、ひいては都賀庭鐘を論ずることともなるであろう。

「白峯」の論

——「英草紙」をけなすことが「雨月物語」をほめる方法であったという文学評価技術について——

「白峯」が「撰集抄」や「保元物語」などの先行国文学とともに、中国の俗文学「王安石三難蘇学士」（「醒世恒言」）「閻陰司司馬貌斷獄」（「古今小説」・「喻世明言」）を直接・間接の典拠としていることは重友博士所説に明かであつて疑いえない。

したがつて「白峯」の論の為には、「白峯」とまつたく同様にこれら中国俗文学をそれぞれの典拠とした「英草紙」の、「後醍醐帝三たび藤房の諫を折く話」「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」との比較が必須であろう。博士は「庭鐘と秋成」（「近世文学の位相」所収）において、これら二つの中国小説に対する庭鐘と秋成両者の方法を、諷刺的に対する諷案的、術学的に対する知識的として対比し、秋成をあげ、庭鐘を貶された。たしかにその対比は一応の正しさをもっている。しかし、その差異はたして両者の本質的差異であろうか。それはいわば技法の問題であり、また技法の問題としても十全に正しい対比でありうるか否か、疑問の点がないとはいえず。博士は「白峯」に対比するものとしての右の二話から、論をさらに拡大して「英草紙」全巻を通じての作家庭鐘の特徴として、諷刺的傾向を主張された。たしかに博士の指摘されるごとき逐字訳的小

説の存在を「英草紙」において否定することはできない。「黒川源太主山に入つて道を得たる話」などそのいちじるしい例である。しかし同時に、「英草紙」全巻を諷刺的とのみ規定することにはある種の強弁があるといふのではなからうか。

基本的にはむしろより多く諷案への志向がうかがわれると思う。しかもこの場合、注目すべきことは、「英草紙」においてより多く逐字訳であるものは、概して個人的話柄性（今仮りに造語した。人間個々にかかわる話）が強いこと、逆にいつてより多く諷案的なものには、経世的話柄性（同様造語。歴史に取材し、人間個々の様相を離れて、筆を経世済民・治国平天下におよぼす話）が強いことである。

素朴にまた常識的に考えて創作態度としては逐字訳は軽く諷案は重いといふであろう。そして庭鐘における重いものが「歴史的」なものであること、「経世済民」に関係づけられたものであることは何よりも興味深い。

たとえば当面の説話「後醍醐帝三たび藤房の諫を折く話」（以下便宜上「藤房三難」とする）をみよう。本説話は原拠「王安石三難蘇学士」（以下便宜上「王安石三難」とする）においてみられた、単なる知識的興味としての三難（個人的話柄）を、建武中興をめぐる政治論としての三難（経世的話柄）に展開し、その転化変質において一篇を構成しているのである。

それをまつたぐの偶然的処置とはいひ難い。原拠の知識的興味としての三難を、そのままの質、そのままの性格において日本の過去にひるがえすことが庭鐘にとつてより困難であつて、政治史的事実

への附会がより安易な方法であつたとは何人も説明しえないであろう。何よりも、後年、庭鐘自身、この「王安石三難」を再び採り上げ、今度は純粹に知識的な説話として生かして、「猥瑣道人水品を弁じ五官の音を知る」「莠句冊」という一篇をものしている事実を指摘しておこう。この点からいつて、最初の翻案が経世的なものに傾斜した原因を技倆面に定着せしめることは困難である。

原拠「王安石三難」の翻案において、二つの途（可能性）が庭鐘にあつた。個人的（個人的話柄性の意）方法と経世的方法と。そして前者は庭鐘の採ふ所ではなかつた。庭鐘は歴史への附会による経世的方法をとつた。博士は庭鐘の創作心理の追体験において、このような考慮をほとんどはられなかつた。

それは王安石を後醍醐帝に、蘇学士を藤房に附会してゐるに過ぎない。（「庭鐘と秋成」——以下略——一二三頁）

なるほどそこには人物・国土の置き換えに伴ふ、当然の相違は見られる。藤房は蘇学士ほど輕薄ではない。（一二三頁）

などに明白な様に、原拠と本説話との關係（かさなりとずれの諸關係）をすべて「附会」の一語で覆つて、その間の微妙な問題に全くふれる所がなかつた。成程差異はある、しかしその差異は附会が必然的にもたらした差異だ——これでは差異を十分に論じたことにはならないであろう。

原拠と本説話との差異には、単に人物・国土の置き換えに伴うものとして説明しきれぬものがある。やや煩瑣であるが例証しよう。

ここには二つの三難がある。

	王安石三難	藤房三難
一難	「菊花落弁」 王安石の「西風昨夜過円林吹落黃花滿地全」をあやまつて難ず。	「逃水」 帝の「あつま路にありといふなる逃水のにげかくれても世を過すかな」を誤つて難ず。
二難	「瞿塘中峽の水」 下峽の水を中峽の水と称して獻じ、みやぶられる。	「仏教」 帝の仏教尊崇は國家を危くするの恐れありと諫奏し、逆に帝に反論される。
三難	「乱抽一句」 王安石は一句を乱抽させ下句を添えて誤らない。東坡は一句を解しかね無用の言を弄し、対句を求められて答ええない。	「龍馬進奏」 龍馬進奏のことあり、逸遊度を超え太平に慣れて國家危しと見て諫争し、いれられず出奔する。

右の対比に明かな如く、「藤房三難」は第一難を例外として（その例外とても序曲的陰翳を含んで、あとの二話と絡みあうのであるが）、「王安石三難」における、単なる水の鑑別法、文学における博覧強記の話は（単なる趣味的・知識的・個人的嗜好の話は）、みごとに変貌し変質して、天下國家を憂うる、真の意味での士大夫的問題と変つていのである。それは主題の変化であると共に、本質の変化でもあつた。たしかに王安石はそのままに後醍醐帝の原拠であり、藤房はまさしく蘇学士に照応する。しかし「王安石三難」から「藤房三難」へ、その展開において、それは単なる附会の域をでて

いるのである。

博士はこのような問題（趣味的なものから経世的なものへ、あるいは個人的なものから社会的なものへ）をまつたく等閑視して、庭鐘を目して単なる逐字訳者、せいぜい附会上手の職人であるとされるようである。それはそれなりに意義をもつ。しかし右のような考えもまた可能ではあるまいか。

「藤房三難」のうち、初めの二難は史実として抛る所がないことから、博士はさらに筆をすすめて、

かくしてそれらは藤房の身の上のこととして語られてはゐるが、大部分は架空の事柄を作為して、そこに附会したものに過ぎない。しかもそれは常に典拠への対応といふことが先頭に立つて、作者を引ずつてゐた自然の結果に外ならない。（一二五頁）

と論断されるのであるが、私にはこの論理はいささか理解しがたい。典拠に照応した場合はまつたくの追隨といい、典拠から離れて立論し叙述すれば、それが虚構の（史実でない、架空の）事柄である故に、帝と藤房との間にそのような問答があつたと記述したものがない故に、典拠への顧慮に引きずられた結果としての附会であるといわれる。

いずれにしても——典拠についても——、博士は「藤房三難」を、はたまた、広くは「英草紙」を、附会として規定されねばならなかつた。何故ならば庭鐘の方法を附会として貶置する事においてこそ、博士の秋成評価が成立するからである。

「全く典拠への対応のための作為であつて、かやうの事実があつたとは考へられないのである」（一二五頁）といわれるが、叙述される

事柄の虚実が（基づく史実のあるなしが）、その説話の文学的評価と一体いかなる関係にあるのであろうか。

あきらかに「王安石三難」と「藤房三難」とは、その本質において大いなる差異をもつてゐる。原拠の単なる趣味性を超えて、社会的な、歴史的な現実が、庭鐘によつて新しく問題化されているのである。三難という、知的興味にのみ依存した説話構成を離れて、建武朝廷の政治の善悪がここでは論じられている。ことは、詩の、茶の問題ではなく、天下と国家との、従つて民衆のいつの日にも切実な問題なのである。

典拠そのままの途を通らず、庭鐘は典拠を離れて独自の道を辿つた。すなわち、この一篇において見事に政治論を文学の素材としたのである。この動かし難い事実を目しながらしかも、

たとへそこに典拠を離れた作者自身の知識の披瀝があらうともそれもまた知識的興味を中心として作り成された典拠の掣みに倣ふものでしかない。（一二五頁）

それはあくまでも支那小説への追隨を示すものであつて、何等自主的な態度主張から成されたものではない。（一二五頁）と論断されるのは、やや公正を欠くうらみがあると思われる。

同様、まつたく同様のことは前引の「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」（以下「任重断獄」と略記）と「閑陰司司馬貌断獄」（以下「司馬貌断獄」と略記）との関係に対する博士所論においても見うけられる。

（「任重断獄」は）典拠の説くところを忠実に襲うたものであり、それだけに人物の置き換えに伴ふ当然の相違をも顧みず史実の大

胆な改作を敢てしたものであつた。かくしてその間における作者の苦心は要するにいかにしてかれをこれに附会すべきかに集中されてゐたかといふことができるのである。(一二九―一三〇頁)

しかしはたして「史実の改作」は、原拠への忠実な翻襲と牽強附会のためにのみ行われたのであろうか。

この改作過程の中には、庭鐘の史観は、政治観は、片鱗も存在しないのであろうか。

原拠と「英草紙」との差異は、この断獄説話においてもまた、庭鐘の政治論にかかつているのである。

庭鐘の拠つて立つ儒教的倫理は、前述の「藤房三難」において、後醍醐帝をその知的優位にかかわらず倭弁と規定することによつて否定し、藤房を積極的に肯定した。王安石の一方的な優位を語ることに終始した原拠との差異の大きさを思うべきであらう。

同様のことはこの「任重断獄」においてもいえる。

両者を通じてたしかに「史実の改作」はある。しかしそれは文芸の担う性格上あまりにも当然のことであつて問題にならない。問題は、その改作が果して典拠への単なる附会のためになされたものであるか、それともそのような附会的段階をこえて、庭鐘の内なるものの声に従つてなされた改作であるか、この点にかかつているのだ。

博士によれば、「英草紙」の典拠そのままの部分とはより、典拠ばなれの部分もまた、ことごとく附会の為ということとなり、当然、庭鐘の作家としての独自性は、かたろうとする「何」は、ほとんど見られないこととなる。しかし、私はそのような見解を疑問に思う。

たとえば、「藤房三難」における仏教観と「任重断獄」における仏教観とは、完全に一致している。同時に、「藤房三難」の後醍醐帝観と、「任重断獄」の好意的な足利尊氏・直義観とは、わかち難く表裏一体をなすものである。

まづたく別箇の説話において、作者庭鐘の「もののみかた」は、かく一定し、一貫していること、視線に矛盾・混乱が存在しないこと、これらは何を意味するであらうか。

勿論その典拠ばなれのねらいの最大のものは、「翻案の妙」にかかつているにせよ、それなりに、その中から庭鐘の独自性を、ひいては作家としての主張を、見出すことはさして困難ではない。

博士は「白峯」を「藤房三難」と「任重断獄」との関連において論ずるに当り、庭鐘に対するこのような解釈の可能性をほとんど顧慮されなかつた。それは今迄屢説した様に、庭鐘を附会一本槍で規定することから生れたのである。しかし博士といえども庭鐘における作家的主張を全然無視しきることは出来なかつた。すなわち、

「藤房三難」の第二難仏教論において、博士は、まずそれが史実であつたかいなかに疑問を持たれる(勿論、それは私見によれば問題ではない)。そしてその仏教論が結局「作者自身の言説」をそこに

「託すべく仮りに設けられた結構であつたことを思はざるをえない」と一応論じられたのであるが、その論はどこまでも表面的で、「しかしそこに見られる作者の態度はどうであつたか。我々はそこに彼自身が出典中の人物たる王安石その人を気取つてゐるに過ぎないことを、看取するに終るだけである。彼に従へば、そこでは単に典拠の第二難に対応すべき何等かの言説が盛られればよかつたので

ある。」(一三三頁)とあえて否定的に論断されるのである。

庭鐘が単に知識に遊んだか、王安石その人を気取ったか、「第二難」に対応すべき何等かの言説が盛られ、ばよかつた」のか。今は繰り返して論ずる迄もあるまい。

庭鐘は庭鐘なりの内的必然において、この経世論的歴史文学への道を、政治文学への、士大夫文学への道を、すくなくとも「藤房三難」「任重断獄」において撰んだのである。

しかるに庭鐘に関する限り、右の如きやや偏向の立論をされた博士は、恰もその埋め合わせでもあるかのように、「白峯」においては、「藤房三難」「任重断獄」におけるとまつた同様の、典拠と典拠ばなれの関連において、かえつてそこに秋成の独自性と、作家的主張とを見いだされるのである。博士の偏向はここにおいて二乗されたとも見るであらう。

すなわち、博士は、「白峯」において、数多くあげられている典拠、先行作品の、どこにも見当たらないのは西行法師と崇徳上皇との間にかわされる「放伐論」であるとされ、その出典が見当たらないが故に、まさにその為に、その部分こそ秋成の本質的なものであり、ひいては彼の「白峯」製作の動機であるとさえ論を進められるのである。

これの問答は既に製作以前に予定せられたものであつて、決して偶然に加へられたものではないことが知られるであらう。(中略)かうして我々は「放伐論」がこの一篇における、少くともその前半における中心題目として最初から作者に予定せられてゐたものであることを認めてよいであらう。恐らくこのこと(「放伐論」

をさす——松田註)がなかつたならばこの一篇はつひに作成されることなくして終つたであらう。何故ならこれを取り除いた後には何一つ新しいものとしては残らないであらうから。そしてさうした古い材料の寄せ集めのみに彼が満足する作家であつたとは思へないからである。(一三六—一三八頁)

すなわち、「英草紙」においてはその文学性否定の(庭鐘の作家的独自性否定の)資料であつた原拠に加うる新添資料が、条件はまったく同じであるにかかわらず、この「白峯」の場合には、かえつて秋成の独自性の証明となり、ひいては創作動機すらそこから抽出されているのである。重ねていえば「白峯」のすぐれている点、独自性のある点は、典拠のない部分、つまり「放伐論」にある、秋成はこの「放伐論」を文学的に展開する為に「白峯」をかけたのだと論ずる重友博士は、同時に「藤房三難」においては、典拠のない部分を附会のためと規定し、無定見な中国小説追隨の一証とされるのである。

それを矛盾でないとはいひ切れないであらう。今「藤房三難」と「白峯」と、条件はまったく同じといったが、博士にとつては決して条件は同じでなかつた。

その為にはいろいろ説明を試みていられるが、それはむしろ読者の為というよりは、博士自身の為の説明ではなかつたか。従つて、一つの説明が同時に一つの新しい説明を要求せずにはおれないという、悪循環が随所に見うけられるのである。

たとえば、「藤房三難」において庭鐘が、「藤房の説き伏せられることによつて帝の御論議の正しさを暗黙のうちに承認してゐる」

(一二七頁)とした博士は、「白峯」においてはそのままの論法で、結論だけは正反対に、「作者が西行の言説に対する支持と承認とを認めることができる」とされるのである。

後者の論理は正しい。前者は、前者に対する博士の理解は誤つている。

ここにあって今一度、庭鐘の創作心理をくだかしをおかして復習しよう。

すくなくとも当面の「藤房三難」は中国小説を翻案するということが究極の目的であつたとしても、それだけのものではないこと、単なる知識的、趣味的話柄から、経世的、歴史的、社会的話柄への展開が、この翻案過程にうかがえることは屢説した通りであり、重ねて証明する迄もあるまい。この庭鐘の翻案過程から、庭鐘が何をかたらんとしたかは(博士の言葉をかりれば庭鐘の「創作の動機」は)容易に察知しうる筈である。

王安石・蘇学士の三難説話を、何が何でも日本の舞台に引き移せばよい——それだけではない筈である。この三難を、帝と藤房とに翻す事において、庭鐘は一步こえて自らの後醍醐帝批判を叙述する。

倭弁巧智の為政者、智は奢りに用い、弁は己れの非を飾るに足る上一人が、ついに諫めうべからざる人間が、ここに描出されている。藤房が三難ともに敗れたことは、蘇学士の敗北に倣うものであると共に、更に新しく、ためうべくもない小人上智の究極を描き出す(つまり批判することでもあつた。それは論難に勝つた筈の帝が自ら認める所である)。

帝藤房に心病を言い当てられ心に深く恥ぢて、此時只博識を以て是を庄さんと欲し……

この文章の何処から庭鐘が帝に左袒するものであるという博士の見解がひきだせるのであろうか。

たしかに三難共に藤房は敗れた。しかしその敗北は、敗北においてこそ最も適切に、帝の倭智を明かにする為の敗北であつたのだ。かく理に明なる君なれども、逸遊日々にさかんれば、此朝廷治り果つべくも覚えす。折あらば、再三折檻の諫を奉らんものをと思ひくらされける。

大内裏すでに造営をはじめ。(中略)帝此時太平に志怠り給ひ、馬場殿を建て、逸遊度なく、女謁盛に行はれ、朝野怨を含むもの甚多し……

これらの条々から、読者は直ちに作者庭鐘の真意が藤房の側にあることを読みとるであろう。どのような論理の力で、庭鐘が作者として「藤房が説き伏せられることによつて帝の御論議の正しさを暗黙の中に承認」したことになるのであろうか。

「倫言の弁する所謂れなきにあらぬ」ことは、かえつて藤房をして折檻の諫めへ自らを駆りたてることであり、ついには建武政治の絶望としての遁世という、正にぎりぎりの形での最後の批判に迄迫りやることであつたのだ。その遁世は単なる屈服ではない。それは彼に、たつた一つの可能性として残された抵抗であつた。藤房(庭鐘の描くところの)の立つていた儒教的倫理政治家としての立場からの、最後の痛切な発言が実にこの遁世だつたのだ。

その結果は「帝驚き思召して父の宣房の卿に詔して是を求め還さ

しむれども竟に其行く所を知らずなり給」うたこととなる。

しかし我々はここで、「藤房三難」の今一つの原因、「太平記」巻十三「龍馬進奏事」「藤房卿遁世事」を忘れてはならぬ。たしかに庭鐘はこれら二条に多くを負うている。引用の箇所さえも「太平記」をそのままうつしたものが多し。龍馬進奏に当つての藤房の諫言、いれられぬ為の遁世、帝の驚き等はまづたく「太平記」によつてゐる。しかし何よりも大事な、帝の反論、反論の勝利、勝利にかかわらぬ帝の内心の負い目等はまづたく庭鐘独自のものなのである。従つて叙述の筆の簡略さに抱らず、遁世する藤房の追いつめられた状況は、ずつと明確に描かれている。「太平記」におけるかぎり、帝は諫言を容れぬ暗主にすぎない。「英草紙」においては、帝は諫言をいくるめる、邪佞巧智の人としてとらえられている。その意味で、原拠としての「太平記」の検討は、むしろ庭鐘の独自性をきわだたせる結果となるのである。

庭鐘が後醍醐帝に対し、しかく批判的であつたことは単なる偶然、或いは脚色上の便宜主義に基づくものではない。その証拠として多言を要しない。「英草紙」二の三話「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」の一条をひくだけで十分であろう。

其故は主上御位に復し給ひてより、仮初の御遊に琵琶箏など弾ぜさせ給ふにも、燕なる曲のみ造らんと望ませ給ひて、ことしげき世を治め給ふべき君にあらず。是古へより伝へいふ、桑間濮上の音起りて国亡びしといふも此心なり。

なお念の為同書五の九「高武藏守婢を出して媒をなす話」や前述の「任重断獄」に散見する北朝びいきの精神も決して後醍醐帝批判と

無縁ではあるまいことをかきそえておく。

このように見てくると、今迄まづたく問題にならなかつた反後醍醐帝という立場が、実は庭鐘には本来的な、本質的な立場であつたろうことは疑いえないであろう。どこから見ても、庭鐘が帝の側にあり、所論ごとく附会のための附会であるとはいえないと思ふ。

かく検討した結果、「白峯」「雨月物語」と「藤房三難」・「任重断獄」(「英草紙」)とを分つものとして、博士が数えられた差異——翻案的と翻訳的、知識的と術学的——は、その存在理由をほとんど失うにいたる。「白峯」と「藤房三難」・「任重断獄」の両者は、典拠ばなれと典拠そのまゝの関係においてみれば本質的な差異をまづたくもたない。

今迄数多くの頁を費して「英草紙」の二話を反芻したことは無駄ではなかつた。この反芻を通じて、庭鐘の独自の主張が明確となり、その経世論、その歴史論(それらの最も端的なものとして反後醍醐帝)が、「白峯」における「放伐論」同様に、作家の内的必然に基づくものであつたことが明かになつた。

我々は当然のこととしてこの二つの独自性、二つの内的必然性の対比にまで考察を進めるべきであろう。二つの独自性、簡約してこれを対比すれば、庭鐘の儒教主義と、秋成の古代主義ということになるであろう。もとよりその対立は、庭鐘と秋成の全文学を通じての対立でもあつた。しかしかくの如き両作家の思想的優劣を計量判定することは今の私の任ではない。

秋成の古代主義と庭鐘の儒教主義、その優劣の私なりの判定はあ

る準備によつて可能であらう。しかしそれはどこまでも思想の優劣であつて両者の文学の優劣ではないのだ。

私は思想の優劣評定は任でないといつた。しかし、思想と文学とのかわりの優劣評定は、いづかなさねばならぬ課題であると思う。当面の問題を離れていえば秋成の古代主義は、その本質に浪漫的な逆行的な要素を含んでいて、非現実へ転位する危機において成立していた。西行と、上皇の間答が闇の中で行われたことはかくて象徴的な意味をもつ。明るく、直き古代主義が玄怪の夜の季節においてのみ開花しえたことは、むしろいたましい文学の勝利というべきであらう。しかし、儒教主義に夜はない。それは言葉の正しき意味において現実そのものである。それは陽光の思想である。多数者の思想である。奇談たると怪談たるとを問わず、作者の意図を超えて、我々が「雨月物語」「英草紙」両書において夜の文学を求める時、その優劣は自ら明かであらう。しかし私はこの問題に関しては準備も分析も不足であつて、他日の機会をまたねばならない。

すでに今までの論証で秋成をあげ庭鐘を貶すべき、秋成庭鐘両者をわかつべき本質的差異は、重友博士の論者からは導きえぬこと、この主張だけはほぼ果しえたと思う。

では一体、秋成と庭鐘、思想家としてではなく作家としての秋成と庭鐘をわかつ差異はどこに見定めるべきであらうか。

いかにしても「白峯」は、「雨月物語」は、「英草紙」をこえて高い芸術性を示している。それは争いがたい事実である。

ではその芳醇さの原因はどこにあるのか。問題は当然、秋成の芸

術的成功の神秘解明となる。

いま、作家が何を語ろうとしたか、その「何を」をかりに内容とすれば、形式は必然的に「何をいかに」の「いかに」にあたるであらう。今まで私ののべてきたことは、主として「何を」にかかわることであり、それにのみとらわれることは、作品の意図と趣意のみみて、情感をみぬ誤りをおかすことになる。リチャーズはいう、「芸術は伝達活動の最高の形式である。」と。さらにいうならば芸術は、形式を通じてのみ可能なのである。

「白峯」の場合、徹底的な彫琢が、多くの典拠と、典拠ばなれの組合せが、隠微と顕現において絡みあう技法こそが、秋成の作家的生命の指標だつた。そしてこの指標を辿ることにおいてのみ、庭鐘をいみじく超ええた秋成の創造の神秘を、解明しうるのではあるまいか。「白峯」の巧緻な布石、精密な構成は、恐らく最高のたかみにあり、その事実を何人も否定しうるまい。それは「何を」——内容と、分ち難くからみあい乍ら、究極的には、「いかに」の、形式の問題であることもまた否定しきれまい。

従つて秋成が庭鐘をこえた要因、要素、それを求めて形式にあると結論することも今はさしてあやまりではあるまい。

ふたたびいう、博士が両者の差異をそこに置かれ、その差異あるが故に秋成を高しとされた翻譯的対蹠案的、術学的対知識的の差異は本質的には差異でありえない。

また博士が庭鐘に欠けて秋成には存在するといわれる、「何を」——作家的主張——も検討すれば、庭鐘においても、むしろ、より明晰な形で発見しえたのである。ここにおいて、両者の差異、秋成

優位の原因として求むべきものは形式より他にありえず、又形式であると答えて十分に正当なのである。

たとえば博士の指摘される通り、「白峯」の主人公の一人としての西行の登場において、秋成はいかに神経を細かく働かしたことであろうか。諸国一見の僧、歌枕に惹かれ、文学への嗜みもうかがわれる僧——読者のあるものはここで既に、名も、状況も伏せられながら、西行的なものの俤げをおもい起すであろう。しかし、一切は謎に包まれている。物語がややすすんで、上皇の御陵に通夜する僧の前にあやかしがあらわれて「円位、円位」と僧をよぶ時、初めて、西行の別名が円位であるということをしつている特殊な知識人が、特殊なよみ方をしてはたと膝を打つのである。たしかに、「西行、西行」という間のびをおそれて、円位という短い呼び名に緊迫感をこめたのであろう。しかしそれと共に、謎の僧——崇徳上皇の所縁——円位（謎の二分の一の解明）——西行（謎の全面的解明）という、この謎ときによる構成の巧緻さが強く働いていることは疑いえない。正に完璧な漸層法的形式によつて、西行は描きだされたのである。そしてこのような「こまかさ」は、一体どの様な読者を期待してのことであらうか。この例はしかしまだ「雨月物語」においては、「こまかさ」の初歩的な段階にすぎないのである。

そのこまかさ、極限においてある文学的自慰、自閉性、さらには文学的自殺にまでいたる実例を、私は「雨月物語」第二話「菊花の約」のさし絵に関してあげ、論証したことがあつた。（日本古典鑑賞講座「秋成」所収「読本の流れ」参照）

それはまさしく鬼気を感じるまでの不毛な、伝達を超えたこまか

さであり、その解明は秋成の作家的深淵のかいまみに他ならなかつた。

このような形式の縷心は、かつて、庭鐘だけでなくどの作家もが意図するところでも、またよくするところでもなかつたのである。あえて私はここ形式の論において、内容においてこそみたとような対比と分析の方法をとらない。先学、重友博士、後藤丹治博士、中村幸彦教授の数々の論考の上にたてば、秋成腐心の跡をたどることは容易であり、その異様なまでの高さ、対比を絶した技巧の意味はあきらかなはずである。まことに秋成は形式においてこそ庭鐘をこえた。そしてこの場合、形式とはほとんど文学そのものであつたのだ……。

この結論はあまりにも平凡で今日すでに結論ではない。そして秋成文学の神秘は依然その謎を深めるのみである。擱筆しようとして今更にW・エンブソンのことばがおもいおこされる……

“Unexplained beauty irritates me”

告白するまでもなく、小論では重友博士への批判だけで息切れしてしまつた。

内容論の、それも基本的な論義で終始して、真の内容論、さらには形式論に展開しえなかつた。しかも、あえて題目に『雨月物語』の評価（1）としたのは、腰くだけへの自戒の意味である。まことに重友説を批判することは、「雨月物語」を評価することではありえないのだ。

—— 本学助教授 ——